

F 8 小学校家庭科観 — 専科教員・校長・一般教育および保護者の比較 —

大阪教育大 新福祐子 加地芳子
大阪教育大院生 ○亀崎多佳子

目的 小学校家庭科に対する一般的見方は近年きびしくなっている。その原因を解明するため、小学校の家庭科の専科教員・校長・一般教員・保護者らの家庭科に対する認識等を調べ、小学校家庭科の今後のあり方を検討することとした。

方法 大阪府下公立小学校の教員・保護者を対象とし、1980年12月には家庭科の専科教員300名、1982年3月には校長300名および一般教員300名、1982年5月には保護者300名について、質問紙法による調査を行った。主な調査項目は、家庭科履修経験・指導方法および教科観などである。

結果 小学校家庭科についての認識に関して以下の結果を得た。専科教員を除く三者の家庭科の印象は、「料理・裁縫」的なものがほとんどであった。しかもこれは履修経験に換るところがあり、潜在意識となって現在の教科観にも影響している。家庭科の必要性・男女共学で学ぶことの意義は認めているが、教科として小学校教育全体の中での重要性はほとんど認められていない。一方、家庭科の専科教員は担当方法として専任制を支持しているが、自らが専科教員であることに満足しているわけではない。家庭科の教科についてのゆきづまりは過半数が感じたことがあるとし、理由に「家庭科に対する生徒の関心・反応に関して」とあった。この現状の中で、今後の家庭科に要望されたものは、「家庭生活の意義を認識すること」「基礎となる知識・技術の習得」に向けての指導であった。これからの小学校教育の中での家庭科のあり方は、教育全般の立場から再検討が必要とされている。